The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十三巻第二号　平成二十七年三月

普一国師志玉の華厳学
――真福寺文庫蔵『五教章視聴記』を中心に――

野呂　靖

問題の所在

室町中期の東大寺戒壇院長老である普一国師志玉（一三八三～一四六三）は、禅僧との交流や能楽書への注釈で知られ、金沢称名寺、高山寺、極楽寺など諸寺院との密接な繋がりを有する幅広い活動で著名である。なかでも華厳学に秀でていたことについては江戸期の僧伝等で高く評価されており、(1) 室町期における華厳学の展開を解明する上できわめて重要である。一方、志玉の伝記については不明な点も多く、「住二戒壇院一、常講二華厳于遮那殿一」（『律苑僧宝伝』巻十四）と紹介される東大寺における講説活動の実態は未詳であった。ところが近年、洛東智積院（真言宗智山派総本山）における聖教調査の進展によって志玉による戒律・華厳関係の講義録が検出され、徐々にその実態が明らかになりつつある。(2)

本稿で取り上げる真福寺文庫蔵『五教章視聴記』六冊（写本）は、法蔵『華厳五教章』三巻に対する詳細な注釈が展開されたものである。本書は従来、志玉との関係において注目されてこなかったが、東大寺戒壇院における志玉の講説に基づくものであり、根来寺と密接な関係を有する真福寺僧により記録された資料である点が明らかとなった。これにより、東大寺における志玉の講説活動について新たな知見を加えることが可能になるとともに、中世後期の南都と地方寺院を結ぶ教学のネットワークについても明らかにし得ると思われる。以下、その講説・伝持をめぐる状況と思想的特徴の一端を明らかにしたい。

一　『五教章視聴記』と志玉による講説

（一）『五教章視聴記』の概要

志玉の華厳学に関わる資料としては、『五教章見聞（五教章聴書抄）』十巻が知られている（承応三年・寛政七年刊本）。もっとも本書は講説の聞書であり、文安四（一四四七）年二月十二日に東大寺戒壇院にて開始された志玉の『華厳五教

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

章』講説を根来寺大伝法院学頭の玄音房道瑜（一四二二～一四九三）の記録である。したがって、志玉の純粋な注釈を留めたものとはいえない。(3) また、道瑜は志玉講の記録にあたって根来寺中性院聖憲（一三〇七～一三九二）の『五教章聴抄』を追記・転用しており、根来寺における華厳学研究が多分に反映されている。

これと同様の特徴を有する資料が真福寺文庫蔵『五教章視聴記』六冊（『真福寺文庫撮影目録』下巻、四九五頁下）である。本書が志玉講に基づく真言僧による聞書であることは、以下の識語・奥書等から判明する。

文安三年十一月二十二日始之於南都東大寺戒壇院／読師普一長老志玉和尚只恐廃忘_記之可為九牛之一毛歟　任舜記之／（『五教章上視聴記上』内題下）

去文安三年冬比於南都東大寺戒壇院長老普一潤山／志玉和尚奉値此章聴聞之時以纂釈等給テ披覧之処連々／追日_取彼要義_私ニ三巻令記之畢／長禄四年〈庚辰〉八月中旬於尾州真福寺_依賓客等ノ所望_従リ去／七月一日_至テ八月十六日_中下二巻分ノ視聴記都合四巻令再治_畢／蓋是レ短才昧劣ニシテ難得_文義之首尾_剰ヘ辺土之境ヒ不得諸記書／籍_故引文等非無不審_只為扶ニ一室之蒙昧_也更不可及他家披覧_者也可憚々々／廻施法界平等利益而已／尾州真福寺沙門任舜／（『五教章下視聴記下』奥書）

これによれば、文安三（一四四六）年十一月二十三日から志玉は東大寺戒壇院にて『華厳五教章』講義を実施したが、それを尾張国大洲真福寺住持の任舜が聴聞し、上・中・下三巻に分けて記録した。また任舜はその後、長禄四（一四六〇）年八月に真福寺にて中・下二巻（四冊）を再治し、さらに真福寺の末寺である性海寺（越前国三国湊）の住持「秀明房頼済」が根来寺にて書写した草本とあわせて上巻部分（二冊）を再治したという（『五教章上巻視聴記上』）。各冊の識語・奥書から判明する成立経緯について整理すれば次表の通りである。

巻次	記録	再治
上巻・上	文安三年十一月二十三日	長禄四年九月二十三日（性海寺）
上巻・下	同年十一月二十二日	同年十一月（性海寺）
中巻・上	同年十二月八日	同年七月上旬（真福寺宝生院）
中巻・下	同年十二月頃	同年七月中旬（真福寺宝生院）
下巻・上	同年十二月二十五日	同年八月上旬（真福寺宝生院）
下巻・下	同年冬頃	同年八月中旬（真福寺宝生院）

（二）志玉による講説の実態

このように、志玉による講説期間は文安三年十一月・十二月の約二ヶ月間に及ぶものであったが、注目されるのはこの年時が道瑜の記録する文安四年二月の講義（『五教章見聞』）の直前に相当している点であろう。すなわち志玉はこの時期、戒壇院において繰り返し『五教章』を講じていたのであり、その場には複数の真言僧（根来寺僧）が聴聞していたことになる。志玉の『五教章』講説が諸宗僧侶が聴講に訪れる著名なものであったことは、例えば臨済宗相国寺の瑞渓周鳳

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

（一三九二～一四七三）が『臥雲日件録』に「予（＝周鳳）初寓南京、就普一習五教章」（寛正四年十二月十六日条、『大日本古記録』一四六頁）と述べていることから知られる。真言や禅など諸宗僧侶による「華厳修学の拠点」としての志玉講の存在が浮かび上がる。

ところで志玉はやはり文安四年二月に『梵網経古迹記』下巻の講説を戒壇院で実施している。[4] なぜ志玉は文安三～四年にかけて度重なる講説を行ったのであろうか。これを考えるにあたり当時の戒壇院の状況に注目したい。

戒壇院は治承四（一一八〇）年に平重衡の兵火によって焼亡するが、俊乗房重源（一一二一～一二〇六）によって戒壇堂・僧房など堂宇が再興された。しかし文安三年一月二日、再び出火によって「三重の戒壇、五間四面の千手堂」を残して受戒堂・講堂・談義所など「悉く」焼失する（『東大寺雑集録』巻七、日仏全一二一、一六六頁下）。すなわち志玉による『五教章』講説は、まさに二度目の焼失を受けた年の年末に開始されるのである。そして、その伽藍復興を担ったのが室町幕府第六代将軍足利義教（一三九四～一四四一）の命を受けた志玉であった。[5]

志玉が伽藍の造立を達成したのは七年後の享徳二（一四五三）年であったが（戒壇堂・廻廊）、そもそも志玉は義教と密接な関係を有しており、永享元（一四二九）年八月に義教に授戒し、さらに同八（一四三五）年三月には『華厳経』「普賢行願品」の連続講義を行っている（『蔭涼軒日録』永享八年）。このように、文安三年末から四年にかけての度重なる精力的な講説は、戒壇院諸堂の焼失という事態に直面した志玉と、その華厳学に深い関心を寄せる義教が関与した教学的な「戒壇院復興」が意図されたものであったと考えられるのである。

（三）任舜について

こうした再興期の戒壇院に聴衆として参加していたのが筆録者である任舜（一四二四～？）である。任舜に関する資料はきわめて限られているが、「第八世任舜、従長禄二年文正元戊年九ケ年住職也」（『五教章中視聴記下』奥書朱書・第四十世栄順）とあるように、長禄二（一四五八）年から文正元（一四六六）年までの九年間、大須真福寺の第八世住持を務めた学僧である。房号は「祐乗房」であり、『真福寺本願能信上人百年忌御仏事日記』（『愛知県史 資料編九 中世二』二〇〇一、八二八頁所収）によれば、「快舜後ニ改二名任舜一」とあり、「快舜」とも称していたようである。

従来、真福寺の住持については、根来寺中性院流の聖教を伝えた初代能信（一二九一～一三五四）、東大寺東南院聖珍より伝授を受けた第二世信瑜（一三三三～一三八二）など真福寺創成期の学僧が著名であったが、[6] 真福寺聖教には任舜の書写にかかる資料が数多く伝存しており、その存在は無視しえな

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

い。なかでも倶舎・華厳文献を多く書写・伝持しているのが特徴であり、志玉講を聴講していた文安三年十一～十二月の間には、「普一長老御本」を用いた『五教章』注釈書の書写も確認できる（審乗『五教章問答抄』奥書、『真福寺撮影目録』）。[7]

また任舜は、初代能信の百回忌法要に当たりその諸事を「後代の亀鏡」とすべく詳細に記録し（『真福寺本願能信上人百年忌御仏事日記』）、晩年には八宗（律・倶舎・成実・法相・三論・天台・華厳・真言）の教理の要点と祖師の系譜を記した綱要書『八宗事』（龍谷大学図書館蔵・文明五［一四七三］年写）を著述している。こうした任舜の精力的な聖教書写や綱要書の撰述状況からは、開基百年を迎えた真福寺において、再度、顕密諸宗教学を位置づけていこうとする任舜の意図を窺うことができる。その一端が『五教章視聴記』の撰述であったといえよう。

二　『五教章視聴記』の思想的特徴

（一）日本華厳の系譜に対する認識

次に『五教章視聴記』の思想的特徴について述べたい。本書は『華厳五教章』（和本）に対する随文解釈の形式を取り、志玉の義については「長老仰云…」「和尚云…」とし、筆録者である任舜自らの見解を「私云…」と追記する。本書の最大の特徴は、宋代の道亭『義苑疏』・観復『折薪記』・師会『復古記』など宋大華厳の『五教章』注疏を多く依用し、日本華厳では東大寺戒壇院凝然（一二四〇～一三二一）の門下にあたる十悟房審乗（一二五八～一三一三～？）『五教章問答抄』、称名寺湛睿（一二七一～一三四七）『五教章纂釈』を重視する点である。また景雅・明恵を中心とする高山寺義を用いている。

本書に記録された志玉の講説のなかで最も重要であるのが、従来不明であった鎌倉期以降の日本華厳の系譜について志玉が述べた以下の箇所である。

> 此外白衣〈花厳宗尊勝院ノ／門輩等也〉黒衣〈律宗戒壇院／門流等也〉、二宗ノ碩学各作書籍ニ了簡ル此章ヲ。其末記多之ニ。白衣方ハ四部ノ抄東南院宗照等作、薬師寺義聖私記、又東南院ノ観理、□広沢ノ寛朝之私記モ在之ニ。〈只云私記ニ義聖ノ私記ノ事也〉。黒衣方ニハ金沢ノ纂釈、十悟房ノ問答抄等、其外多之ニ云々〉。（『五教章上視聴記上』）

ここでは東大寺の華厳学について「白衣方＝華厳宗」と「黒衣方＝律宗」との二系統を立て、「尊勝院の華厳」と「戒壇院の華厳」との明確な区別化が図られている。中世東大寺において「白衣」が学侶、「黒衣」が戒壇院律僧を象徴することは知られているが、[8] ここでは院家による教学的な差異を表示するものとして用いられている。

また「黒衣方」はあくまで湛睿など凝然門下であり、凝然自身が外されていることは注意されよう。従来、しばしば凝

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

然が東大寺の華厳学を規定したと評されてきたが、『五教章視聴記』における凝然引用はわずか三例（『通路記』）に止まり、筆録者の任舜が再治にあたり参照した文献もまた「先年聴聞之時依纂釈問答抄等抜要義一條令記之」（『五教章中視聴記上』奥書）とするように湛睿・審祥の注疏であった。このように任舜や道瑜など真言僧が受容した志玉の華厳学とは、戒壇院の華厳（黒衣）であり、凝然「門下」の義であったといえよう。

一方、『五教章視聴記』には高山寺華厳についても興味深い分類を示している。

此即不壊末等者、此ノ云末等ニ本寺末寺異義アリ。本寺ノ義〈東大寺〉ハ如折薪記ニ三本三末ヲ即云本末ニ下真該妄末等又爾也。三本三末如此ニ。真妄也。真本ハ悟リ妄末ハ迷也。意可知ニ。末寺ノ義ハ〈栂尾高山寺明恵上人ノ義也〉立二本四末ノ義ニ。二本ハ真如ノ不反随縁。四末ハ依他ノ各ノ二義也。（『五教章中視聴記上』）

これは『五教章』「義理分斉」「三性同異義」中の「末を壊せずして常に本なり」の一文を巡る議論であるが、「本寺」（東大寺）、「末寺」（高山寺／明恵）という区分が明確化されており、志玉は「末寺ノ義ハ甚有ニ所以ヘ也」として最終的に明恵義を採用している。

本寺・末寺の呼称は明恵の著述には見られず、高山寺側で(9)は『五教章類集記』（建治二［一二七六］）年）が初見であるが志玉の時期には「教学的な相違」としての本寺・末寺意識が顕在化していたと考えられる。この理解はその後、江戸期の『五教章』注釈書において定着するが(10)、本書はその最も早い例と考えられ、日本華厳の基本的な枠組みがこの時期に成立したことを窺わせる。以上を図示すると次の通りである。

東大寺（本寺）┬白衣方（華厳宗尊勝院門輩）
　　東南院宗照、薬師寺義聖、東南院観理、広沢寛朝
　　└黒衣方（律宗戒壇院門流）
　　金沢（湛睿）、十悟房（審乗）
高山寺（末寺）──明恵上人義

（二）密教説の依用

志玉講の特徴として注目されるのが、『纂釈』『問答抄』には存在しない、次の様な密教説への言及である。

十託シテ事ニ顕シテ法ニ生ル解ニ門等者（中略）此ノ門ノ意ハ諸法託テ事ニ令悟ラ人ニ此レ即事而真ノ義也。挙テ五指ニ表示スルハ五仏ニ五指即五仏也。実ニハ能所無別ニ縁起相由ノ之法界縁起ナルカ故此ノ諸法ノ上ニ同類異類一多大小長短高下浅深貴賤好醜等ノ種々ノ差別法此不同也。然トモ挙レハ此ノ一法ニ則同即異即一即多等諸義顕レテ無ク有ルコト障碍ニ融通自在也。此即真理具ル無辺ノ法ニ故真理全現ノ之一事ニ当体自具ニ無辺法界ニ随テ所生ノ解ニ即顕其法ニ故名託事顕法生解門ニ。付之ニ有便ノ託事無便ノ託事ト云義アリ。以五指ニ顕ハ五仏ニ有便ノ託事也。以一指ニ顕ハ五仏ニ無便ノ託事也。此ハ各具互具等ノ意也。〈和尚云真言ハ託事ノ一門ト云此ノ事也。三部五部等皆是託事顕法ノ意也〉凡此ノ託事門ハ真宗ノ四万別相ノ位ニシテ云即事而真ニ同也。（『五教章中視聴記下』）

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ここでは『五教章』「義理分斉」における十玄門の第十「託事顕法生解門」について、事法である五指が五仏を表示するなど密教説の「即事而真説」を取り入れた特異な解説が示されている。本書は聞書であるため、筆録者の任舜がいわば選択的に真言教理に関する志玉の教説を記録した可能性が想定されるが、『五教章見聞』にも「師云」としてほぼ同様の形で記録されており（『五教章見聞』巻六、二五右）、この全体が志玉の講説に基づくものであったとみてよいであろう。

こうした顕密を対応させる解釈の淵源として注目されるのは、「真言と華厳の託事門は全同である」と強調する明恵門下の順高編『五教章類集記』の以下の記述である。

性師（＝順性房高信）云真言道ノ法門又以テ如此三密加持四曼不離ノ故ニ印契ヲ以テ実相真理ヲムスヒアラハス即チ語意ヲ印ノ下ニ摂シテ即事而真ト証ス。仍テ方円三角等ノスカタ全ニ此レ息災増益等ノ法門也。彼ノ宅事門ノ建立全同ナル者歟。只顕密ヲ異トスル計也（云々）。（順高編『五教章類集記』巻三、五二丁左）

また、『類集記』の影響を強く受けたと考えられる根来寺中性院聖憲の『五教章聴抄』（一三三四年成立）には「託事顕法生解門者此門意ハ真宗ノ即事而真ニ相似セリ」（『五教章中巻聴抄』下、日仏全六九、四九八頁上）と指摘されている。志玉はこうした高山寺―根来寺に継承された顕密を対応させる華厳理解を継承していたといえよう。

（三）成仏説について

こうした密教説への言及は、非情成仏の可否をめぐる議論においても見ることができる。

問、円教意非情可有覚性乎。答、爾也。有情之覚性ニ融非情之相故下章ニ種姓甚深通依及正（云々）。探玄記仏性及性起通依正（文）。故処々云解釈以性融相之外ハ不許直有覚性也。或云性相々融之義ヲ以テ云爾。終教モ事理無碍ノ宗也。仏性重ニ不通非情乎。故知円教意ハ直ニ於非情可シト有ル覚性覚ヘタリ。故ニ密宗ニハ立非情有性之義（云々）。探玄云若三乗教ノ真如之性ハ通情非情開覚仏性唯局有情故涅槃云等文、終教ハ以真妄和合之縁起為宗。円教ハ依法性融通情非情ノ相融カ故覚性通非情也。（『五教章中視聴記下』）

日本華厳における非情成仏の議論は既に平安期に登場し、観円（親円）『華厳宗種姓義抄』一巻や、聖詮『華厳五教章深意鈔』では「情無情無二相故、依性相相融之義、述非情成仏之義也」（大正七三、一二頁下）の立場から円教の成仏を認めている。『視聴記』も同様にその理解を継承しているが、志玉はここでも「密宗」との関連に言及し、密教において非情有性を認める前提には、華厳円教の「非情有覚性」の立場があることを強調するのである。

三　小結

従来、室町期の華厳学は「衰退の道を歩み、見るべき成果

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

はない」と考えられてきたが、[11] 真言諸寺院における聖教伝持の過程を丹念に拾い上げることによって、新たな資料を華厳思想史上に位置づけることが可能である。『五教章視聴記』に記録される志玉講には、日本華厳の系統を整理し「戒壇院華厳」として位置づけようとする室町期の東大寺戒壇院における教学形成の一端を窺うことができる。教学内容の分析など残された課題は多いがいずれも別稿に期したい。

1　『本朝高僧伝』巻一八では「東大凝然之後、興二大経一者、玉之力居多」（日仏全一〇二、二六四頁下）として凝然以来の華厳学を興起させた学僧として高く評価する。

2　拙稿「智積院新文庫蔵『華厳五教章』注釈書にみる中世後期の華厳学」（『印度学仏教学研究』六〇―二、二〇一三）。

3　『五教章見聞』の成立経緯については、前掲拙稿参照。

4　大谷由香「智積院新文庫所蔵 志玉口述・道瑜筆録『梵網古迹下巻聞書』について」（『智山学報』六三、二〇一四）。

5　「ここに大将軍源義教公、霊跡の荒廃することを嘆かせ給ひ、勧進上人徳融等に仰ありて、戒壇堂並びに廻廊を造立せしめ給ふ。則後花園院享徳二年〈癸酉〉普一国師住持の時に当たれり。」（『南都東大寺戒壇院略縁起』、日仏全一二〇、二二六頁上～下）

6　稲葉伸道「尾張国真福寺の成立――中世地方寺院の一形態――」（『名古屋大学文学部論集（史学）』一四三、二〇〇二）等参照。

7　『五教問答抄』十五冊「文安三年十一月一日於東大寺戒壇院普一長老御本書写畢　金剛仏子快舜之　祐乗房」『真福寺文庫撮影目録』（架蔵番号六〇一―二）。

8　『東大寺続要録』供養篇本（筒井寛秀監修『東大寺続要録』七〇頁）参照。

9　『五教章類集記』では東大寺義について「本寺遍」（巻二、八右）、「本寺ニハ大事ノ論義ニシ候」（巻四、三五右）などとして「当山（高山寺）の御義」との異同にしばしば注意が向けられている。

10　東大寺実英『五教章不審』など参照（大正七三、二三八頁下）。

11　北畠典生「日本における華厳研究の歴史と課題」（『仏教学研究』五〇、一九九四）。

〈付記〉本稿において使用した真福寺文庫資料の閲覧・複写・翻刻に際し、智山伝法院・真福寺寶生院御当局より多大なご厚情を賜りました。記して感謝申し上げます。

（本稿は平成二六年度～二八年度科学研究費若手研究（B）「中世新義真言寺院における華厳思想に関する研究」課題番号 70619220 の成果の一部である。）

〈キーワード〉　東大寺、尊勝院、戒壇院、明恵、五教章

（龍谷大学専任講師）

NII-Electronic Library Service